Program Notes



解説:鉢村優

今年も始まる午後のコンサート。2015-16シーズンの幕開けは東京フィルと長年の信頼関係にある尾高忠明です。マエストロは指揮活動の新しい局面を迎え、振り慣れた作品も「若い頃とはまったく違うアプローチになるだろう」と語っています。とくにマーラーとチャイコフスキー最後の交響曲は、気心の知れた東京フィルとの共演でこそ聴きたい作品。本日は一部を抜粋して演奏されますが、定期演奏会(4ページ参照)では全曲を聴くことができます。そちらもぜひご期待下さい。

さて、尾高忠明といえば英国作品。エリザベス女王から大英帝国勲章を授与されるなど当地での評価も高いマエストロは、まさに日本きっての英国音楽のスペシャリストです。エルガーはもちろんのこと、シェイクスピアを愛したチャイコフスキーも見逃せません。このように今回のプログラムは、「円熟の魅力」と「英国」というキーワードからマエストロのお人柄と音楽をじっくり堪能できる作品が並びます。思い出話や秘話に耳を傾けながら、どうぞ午後のひと時、極上の音楽をお楽しみください。



ウィーンで大流行のオペレッタ

軽妙な筋書きをもつオペラ、喜歌劇(またはオペレッタ)の作曲家としてはヨハン・シュトラウスII世が有名です。本日演奏されるフランツ・フォン・スッペ(1819-1895)も、現在ではやや知名度が劣りますが、当時ウィーンで大変な人気を誇りました。喜歌劇『詩人と農夫』(1846年作)はオーストリア=ハンガリー帝国時代のある田舎を舞台とした物語です。長いこと行方不明になっていた農夫が、実はブダペストで売れっ子の詩人になっていた、という出来事をめぐって様々なドラマが繰り広げられます。本日演奏される序曲は叙情的なチェロ独奏や、牧歌的で朗らかなフルツが魅力的な作品です。

悲しいけれど美しい。フィンランドの国民的作曲家シベリウス

今年生誕150周年を迎えるフィンランドの作曲家**ジャン・シベリウス** (1865-1957) の『**悲しきワルツ』**(1904年作)。これは彼が「クオレマ」という芝居に付けた音楽のうち、1幕の部分を編曲したものです。クオレマとは、フィンランド語で「死」

を意味します。

主人公の母親は病に臥していて、ある時たくさんの踊り子たちとワルツを踊る夢を見ます。やがて死神が現れて扉を叩き、亡くなった夫に姿を変えて彼女を冥土に誘います。美しい旋律の魅力で人気を集める『悲しきワルツ』ですが、物語はこのように物悲しく、不気味でさえあります。

なお、「クオレマ」はシベリウスの愛妻アイノの兄で作家のアルヴィド・ヤルネフェルトが書いた戯曲です。ヤルネフェルト家は8人兄妹で、多くがフィンランドの国民的な芸術家として活躍しました。シベリウスは作家、画家、指揮者であった義兄たちと非常に仲がよく、創作に少なからず影響を受けています。

才知あふれるアンダーソンが 引き出す、アイルランドの魅力

「トランペット吹きの休日」などで知られるアメリカの作曲家ルロイ・アンダーソン(1908-1975)は、ボストンのアイルランド協会の依頼で『アイルランド組曲』(1947年作)を書きました。この協会はアイルランド文化を広める目的で1937年に

26 27

©VisitBritain



設立され、現在も活動を続けています。

1. アイルランド人の洗濯婦

トランペットとピッコロが大活躍する、軽快なリズムが特徴の曲です。1840年代、 飢饉をきっかけに多くのアイルランド人が ボストンに移住しました。彼らは貧しい暮 らしを耐え抜き、やがて経済的、社会的に 重要な地位を占めるようになります。曲の 内容について作曲者は多くを語っていま せんが、こうした歴史を念頭においていた ことは確かでしょう。

2. ミンストレルの少年

小太鼓のリズムに乗せてどこか懐かしい旋律が奏でられます。トランペットが弱音器を付けて吹かれるため、この曲が夜の情景を描いていることがわかります。軍隊では夜、帰営の時刻を知らせるラッパを鳴らすときに弱音器を付けるという習慣があるため、弱音器は夜を示すモチーフとして使われることがあるのです。

3. マローの放蕩者

やや粗暴なファンファーレに始まり、ファ ゴットのユーモラスな旋律が続きます。軽 妙でかわいらしい、まさにアンダーソンら しい作品です。どんどん加速するポルカ で息もつかせず盛り上がります。また、曲の終盤で遠くから聞こえる鐘は教会をイメージさせます。アイルランドの人々はカトリックの信仰を持っていて、それはアメリカというプロテスタントの社会にあって重要なアイデンティティでした。

4. 緑の服

この曲で弦楽器は弦を指で弾いて演奏されます。「ピチカート」と呼ばれるこの奏法はやさしく軽やかな響きが特徴で、アンダーソンのお気に入りでした。なお、緑はアイルランドを象徴する色で、サッカーやラグビーのユニフォームで見かけることができます。

5. 庭の千草

ソロヴァイオリンが朗々とアイルランド民 謡 「庭の千草」を奏でます。 「庭の千草」 はアイルランドの代名詞ともいえる民謡 であり、情感たっぷりに歌い上げられる祖 国の歌を人々は涙なしに聴けなかったの ではないでしょうか。

6. 残してきた彼女

木管楽器や打楽器が大活躍する賑や かな曲です。その中で、翳りをおびた旋律 が印象的に引用されますが、これが「残し てきた彼女」の旋律です。「戦地にいる若 い兵士が故郷に残してきた恋人を思って 胸が締め付けられる」という内容の歌詞 がついています。

若い二人の美しすぎる悲劇

ピョートル・イリイチ・チャイコフス

キー(1840-1893)の幻想序曲『ロメオとジュリエット』(今回は1880年版を演奏)は、イギリスの劇作家・詩人シェイクスピアの同名の芝居に着想を得て作曲されました。14世紀、イタリアのヴェローナを舞台に、若い男女の悲恋が描かれます。いがみ合う2つの家に生まれたロメオとジュリエットは、薬を飲んで仮死状態を装い、駆け落ちしようと計画します。しかしあるすれ違いによってロメオはジュリエットが本当に死んでしまったと思い込み、毒をあおって自殺してしまいます。仮死状態から覚めたジュリエットはロメオのなきがらを見つけ、彼の後を追うのでした。

この作品では両家の抗争と、愛し合う二 人の幸福、悲しい誤解、そして天に召され て結ばれる様子がチャイコフスキー独特の ドラマティックな旋律で描かれています。

逃れられない呪縛?

グスタフ・マーラー (1860-1911)は "交響曲第9番"は作曲家に死をもたら すと考え、恐れていました。モーツァルト やハイドンなど、作曲家が何十もの交響 曲を書いていた時代を別にすれば、マー ラー以前に交響曲を9つより多く書いた 人はいなかったのです。

マーラーは「9番がもたらす死」を避けるかのように、本来であれば9番目の交響曲になるはずだった作品に「大地の歌」というタイトルを付けて発表します。こうして不吉な呪縛から逃れたかに見えましたが、結局、「交響曲第9番」(1910年作)を完成させた1年後に帰らぬ人になってしまいます。

本日演奏される第4楽章の冒頭は、この曲の中でも最も美しい部分の一つです。苦悶に満ちた旋律で始まり、やがてやさしく憂いを帯びた音楽となります。円熟の筆致でマーラーの万感の思いが結晶した名作と言えましょう。交響曲第9番についてさらに詳しく知りたいかたは18ページの定期演奏会の曲目解説もあわせてご覧下さい。

28

は、11ページにある定期演奏会の曲目

チャイコフスキーの慟哭……

続いて、チャイコフスキーの「交響曲 **第6番『悲愴』** (1893年作) 第4楽章目 頭から。ヴァイオリンの激しく切々とした旋 律が、何かを嘆いているような印象を与え ます。時間にして数分、たった30小節あま りの中に、葛藤や悲しみ、さびしさが凝縮 されているようです。

甥に宛てた手紙の中でチャイコフス キーは、「これを作曲しながら幾度とな く泣いた | と語っています。一方で、交 響曲の内容については、全く主観的な ものであり世間に向けて明らかにする 必要はないとも述べています。実はチャ イコフスキーは、交響曲第6番の初演か ら10日経たないうちに亡くなってしまい ます。その原因については諸説あります が、交響曲の随所に現れる、自身の死を 予見したかのような表現はこの作品に ついて様々な憶測を呼びました。チャイ コフスキーが何を考え、何に苦しんでい たのか…その議論はいまだはっきりとし た結論に至りません。

120年たった今でもこの作品は多くの 人を惹きつけてやまない魅力を持ってい ます。本日演奏されるのはごく一部です が、全体を通して聴くことをぜひおすすめ したい曲です。さらに詳しく知りたいかた 解説もご覧下さい。

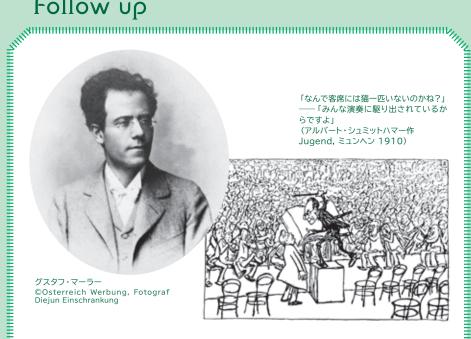
大英帝国の堂々たる"国歌"

エドワード・エルガー (1857-1934) の 『威風堂々』は6曲からなる行進曲集で、 主に1901年から1930年に作曲されまし た。なかでも第1番はとくに有名で、力強 い序奏に続く中間部は、日本だけでなく 世界中で愛されている名旋律です。

この曲の原題はシェイクスピアの戯 曲『オテロ』にある台詞"Pride, pomp and circumstance of glorious war (輝かしい戦争の誇り、壮麗さそして威 容)"から取られています。英国にとって シェイクスピアは国を代表する芸術家で あり、まさに人々の誇りなのです。当時英 国は世界中に領土を持つ大帝国として 君臨していましたので、輝かしく堂々とし た曲調はそうした時代も反映したものと 言えるでしょう。

初演の際に聴衆は熱狂的にこの作品 を迎え、2回もアンコールを要求したとい います。中間部の旋律には時の国王エド ワード7世のリクエストを受けて愛国的な 歌詞が付けられ、『希望と栄光の国』とい う題名で現在でも第2の国歌として歌い 継がれています。

Follow up



やがてわたしの時代が・・・

マーラーと同時代の人々にとって、彼の作品はあまりに新しく、異質なものでし た。当時の新聞には、髪を振り乱して巨大なオーケストラを指揮するマーラーを ユーモアたっぷりに描いた風刺画が掲載されています。しかし彼は「やがてわたし の時代が来る」と言って、決して作風を変えませんでした。

確かに、1960年ごろまで、世界的にもマーラーの演奏機会は多くありませんで した。その状況を変えたのが指揮者バーンスタインです。彼は世界各地のオーケス トラと積極的にマーラーを演奏し、その紹介に努めました。

ある調査によればマーラーは、昨年日本で演奏された作曲家ランキング第18 位。上位にはベートーヴェン、モーツァルトなど幅広い分野に作品を残した人々が 並びます。マーラーはほぼ管弦楽しか書いておらず、作品数自体も多くはありませ んので、この結果は驚くべきものといえるでしょう。また、彼の作品は指揮者の就 任披露やホールの柿落としといった節目の演奏会でよく取り上げられます。いま やマーラーは、オーケストラにとって欠かせないレパートリーなのです。

「ほら、わたしの言ったとおりだろう?」そう言ってマーラーは天国で得意気にして いるかもしれません。

はちむら・ゆう(音楽評論)/1988年東京生まれ、東京大学経済学部卒。オーケストラの曲目解説を中心に執筆活 動を行う。Twitter @hatchsophie